

修士制作「優生通知」要旨

文化創造研究科クリエイティブライティング領域
15001CCM 佐々木 恵理子

修士制作要旨

一. 制作の背景

かねてより、「産む性」や生殖をテーマとして作品を制作してきた。修士制作では、村田沙耶香『消滅世界』を読み、架空世界を借りて生殖から切り離された人間の意識を表現する方法から着想を得た。

制作過程において、作中では消失している価値観（恋愛など）を作中人物に学習させ、違和感を描くことが中心となった。現代とは異なる価値観を持つ主人公の視点を通して、現代を捉えなおす契機となる作品を目指した。

二. 設定

時代は、数十年後の未来を想定している。舞台は、生殖が完全に人工的に管理され、優性遺伝の確保のため国民が「優生者」「適格者」「普及者」と三等級に区分されている社会である。

家族の形態は消失しており、子供達は「すみか」と呼ばれる施設で中学卒業までの期間を過ごす。すみかでは、職員が子供たちの指導や管理をしている。

すみか七九で暮らす、らお（国民番号らー七七九ーおー五四二が呼びにくいいため間の平仮名で呼ぶ）の体験を描く。一章では小学生、二章では中学生である。

三. 梗概

一章

らおはもうすぐ十歳を迎える。法律により、満十歳となった日に「告知」（自分の階級が適格者または普及者であると教えられること）が義務づけられている。らおは自分の階級がどちらであるのか気にかかり、親友むにと共に、誕生日を迎えた児童の階級予測をしながら毎日を過ごしている。らおは自らの告知が近づくに連れて不安がつり、睡眠不足となる。

らおは適格者と告知される。むには告知直後から学校に来なくなり、やがて教育端末の学級名簿から名前が消える。らおは心配になり、むにのすみかへと足を運ぶが追い返される。その帰り道で出会った子供から、むにが自ら命を絶ったことを知らされる。

二章

中学の授業の中で、適格者の中でごく一部のみに優生者となることができる旨が明かされる。該当者には優生通知が届くという。

海とネノはすみか一一〇に住んでおり、そこには、昔の資料が多数保管されていると噂されている倉庫があった。倉庫の中に入り、家族写真や漫画『花嫁様は修業中』、『恋愛理論』という本を読み、初めて見る漢字「恋」「愛」の意味に興味をもつ。

翌日らおは、ゆうに向かって『恋愛理論』に描かれていた絵の真似をし、顔を近づける。すると、らおは胸の違和感を覚える。ゆうに同様の違和感がないかを尋ねるが無いと答えられ、らおは失望する。

すみか一一〇に向かい、らおは胸の違和感について知るために倉庫に入りたいということを職員に話すと、職員は「胸の違和感の解消を手伝うことができるかもしれない」と言い、すみかに来るよう指示し、何度か相談を重ねた。

ある日、すみか一一〇を尋ねて行くと別の職員がおり、らおに「自由」と「平等」という言葉を教え、この国の外にある日本は「自由」で「平等」な国であることを話した。

その日の夜、らおはすみかの居間で食事をしていると、全身を黒い服で覆った人が押し入り、職員を取り押さえた。らおたちも誘導され、車に乗り込んだ。車はどこかに向かって発進し、らおは車内で眠った。

三章

目覚めると、らおは病院にいた。医師により、これまで閉じ込められ、洗脳されていたことを告げられる。らおは混乱のあまり暴れる。

らおが病院の研修室に行くと、同じように作務衣を着た人々が集められていた。一か月の期間、働いてお金を得ること、その金で生活することなどを教わった。また、新たに「朝井静」という名前が与えられた。

やがてらおは退院しNPO法人へと預けられ、買い物の方法やアルファベットを学ぶ。NPO法人の職員はらおを「倭界」（らおのいた社会に対して付けられた呼称）出身者として社会復帰させることで、NPO法人自体の知名度を上げたいと考えていた。

ある日、買い物の帰りに、かつてのすみかの職員と遭遇する。すみかの職員は、らおに「あの日、優生通知が来ていた」と告げる。その後、求人票とともに新聞の倭界についての記事を見る。

らおは強烈な頭痛に悩まされ、寝込む。頭に響いてくる声のうち、聞き覚えはあるが誰のものか分からない声があり、やがてそれが自分の声であり「私はどうしたらいいの?」と言っていることが分かる。頭痛が止み、体を起こすと夜が明け始めていた。らおは靴を持って窓から外に出る。空には紫色と橙色の濃淡が広がっていた。らおは靴を履き、右足を一步前に出した。